た、損傷など史料的な現況にも注意する必要がある。著作ごとに複数の自筆本があって、不完全かもしれないが複数残存している、という食行著作の状況は、研究に際して恵まれていると言えるかもしれない。しかし、自筆本も手作業の産物である以上、著者本人のものでありながら「完璧」ではないというジレンマを絶えず念頭に置いておくべきであろう。

富士講系教派神道実行教の明治期朝鮮・台湾開教

今井　功一

富士講系教派神道の一である実行教は、日清戦争を契機として、朝鮮に管長である柴田礼一を、台湾に布教使として幹部一名をそれぞれ派遣した。その様子は、実行教が一八九四（明治二七）年～一八九八（明治三一）年に刊行していた雑誌『惟一』に連載された。その他の教団活動の報告とは別に「布教通信」というこの報告だけの特別枠が用意され、朝鮮巡教は「西征録」、台湾派遣は「台湾開教」というタイトルが付された。

日清戦争の占領地への布教使の派遣に関して、実行教内では戦死者の慰霊、戦傷病者の慰問に神道家が必要であること、神道各教派は仏教、キリスト教に遅れをとっていることの二点の問題意識が共有されており、派遣に先駆けて『惟一』誌上でも他派も含む神道家一般へ呼びかける文章が複数掲載された。

一八九五（明治二八）年四月、柴田礼一は、随行員であり「西征録」の記者である信徒田中塵外を伴って東京を出発し、国内各地を巡教しながら向かい、下関条約締結後の五月の二週間ほど朝鮮に滞在した。「西征録」の連載は、第一五号（同年四月）から第一九号（八月）と五回に及んだが、初回と二回は出港まで国内をめぐる行程、三回と四回が朝鮮入国後の釜山や漢城での行動、五回が朝鮮を出港してからの帰途についての報告であった。

派遣に先立って『惟一』誌上に掲載された特集記事では、その目的は、朝鮮に派遣された軍隊の慰問、戦死者の慰霊と現地の人々の教化であるとされた。しかし、田中の報告によると、五月六日に仁川に上陸して約二週間の柴田の主な行動は、日本公使館井上公使訪問、京城守備隊独立第一八大隊を慰問、寶丹五〇〇包を寄贈、官立日語学校参観、朝鮮宮内軍部の顧問官岡本柳之助と会見、仁川の兵站部を慰問、副官田中中尉に寶丹一〇〇包を寄贈、釜山の兵站部を慰問と、現地の日本政府機関の訪問や軍隊の慰問に限られた。

一方、台湾へは岐阜の幹部である大教正・北條三野夫を「布教使」として派遣した。「台湾開教」は北條による現地からの報告である。第二三号（一八九五（明治二八）年一二月）に「台湾布教使の第一回通信」が掲載されて以降、第三二号（一八九六（明治二九）年一二月）の「第八、九回通信」まで断続的に掲載された。北條は一一月一六日には基隆港に到着。上陸後は病院や駐屯地を慰問、台湾各地に進軍する部隊にも新聞記者らと同行した。何人かの他教、他派の教師等と行動を共にしている場面が報告されており、北白川宮能久親王の追悼祭を真宗本派本願寺慰問使三等巡教使小野島行薫、神宮教布教使権大教正甲斐一彦とともに総督府門で実施したことや、真宗興正寺派や浄土宗の僧侶とともに、神仏各派合同の慰霊祭を行ったこ

とを報告している。台湾到着直後に北條が台湾総督府に提出した「布教意見書」には、彼の目的が島民教化や教会所設置である旨が記されている。教会所着工の報告もされたが、目立つ活動は各地で帯同する部隊の戦病死者の弔祭であり、島民教化については具体的な報告はなされなかった。

朝鮮行の前年にシカゴで行われた万国宗教会議に神道代表として出席した柴田と実行教は、海外への進出を強く意識していたと考えられる。二つの海外派遣は、軍隊の慰問と戦死者の慰霊、現地の人々の教化のためという二つの意図をもって戦争中から構想され実施されたものであった。しかし、実態としては、現地の人々との直接的な接触はほとんどなく、日本軍の慰問、慰霊、弔祭が主な活動であった。これは、彼らの語学力や教義内容等によるところでもあろうし、特に併合後の台湾では負傷者の慰問と戦死者一六四名、病死者四六四二名にのぼる死者の慰霊という問題が彼らの役割として現場から求められたものでもあろう。

足摺山の改祭について

黒田　宗篤

明治四年に高知藩は、潮江村天満宮神主・宮地大重（一八一九―一八九〇、別名 布留部・常磐）に足摺山（別名 蹉跎山）の改祭を命じた。この時、大重は、報告書を高知藩に提出したが、原本は既になく、現在写しが三種類存在している。一種目は、大重の子再来の写しによる『家牒』で、これは新出史料となるが、破損、虫食いが多いものの、他書にない当日の鎮祭祝詞が収録されている。次に、同じく再来による写しの『異境備忘録』がある。これには大重の報告書の他に、前後の時期の高知藩よりの行政文書も収録されている。この二冊は、明治二十年～三十年頃の写しとみられる。三種目の『南路志続篇稿草』は、高知県史誌編輯係が明治十二年に写したもので報告書の本文中で記載されていた「別紙」も収録されている。「別紙」は、他の二書にはない。

宮地大重による同一報告書の写しであるにもかかわらず、タイトルが「足摺山（亦云蹉跎山）鎮祭次第日記（『家牒』、『南路志続篇稿草』）」、「足摺山（亦云蹉跎山）鎮祭次第御届」（『異境備忘録』）と異なるなどの違いが随所にみられ、中には事実関係に影響する違いも確認できた。

本報告では、三種類の写しを検討し、史実と霊威現象という脚色を選り分けをして、事実確認できる足摺山の改祭を明らかにしたい。以下、検討結果の概要のみを示す。

明治四年九月二十七日、高知藩は、県内の足摺山の神仏分離を潮江鎮座天満宮神主・宮地大重に命じた。大重は、脳梗塞による半身不随（「手足不叶」）を理由に辞退したが、駕籠と人足をつけることを条件に大重宅から約百㎞離れた足摺山の改祭を再要請した。奥院の「不入」の地であり、専任の神職が配置されたものの、他にできる者がいないとの理由である。宮地は、古来から「祟り」で有名な社であることを知りつつ、引き受けた。

宮地は、十月二十五日に高知を出発し、十一月三日中村に到着。当地で神器の取り調べを行い、十日に伊佐に到着。改祭に奉仕する神官は、宮地、専任の社司、禰宜と有志神官七名の計